島根支部 兵教大 大学院同窓会

第13号
平成24年2月28日発行
兵庫教育大学大学院同窓会
島根支部広報部編集
題　字　松本　幹彦先生
発行者　梶谷　光弘
印　刷　(有)川本印刷所

巻頭言

大学院同窓会本部の動きと島根支部の方向について

兵庫教育大学大学院同窓会
島根支部会長　梶谷　光弘

平成二十四年は「辰歳」。この「辰歳」にあたり、昨年十一月、ブータンの第五代国王であるワンチュク国王が、奥様と一緒に日本を訪問されました。その時、東日本大震災の被災地の福島県を訪問され、相馬市内で小学生にこんなことを話されました。

「みなさんは、龍を見たことはありますか？私はあります。龍はそれぞれ一人一人の中にいます。その龍は経験を食べて大きくなります。そのため、年を追うごとに龍は大きくなるのです。・・・自分の中にいる龍を大切にしてください。」

ワンチュク国王は、福島県民が抱えている厳しい現状と課題、そして今取り組んでいる取組を、これから生きていく小学生が大切な経験として生かしてほしいことを熱く伝えられました。

十二支の中で、唯一実在する動物がいない「辰歳」。同窓会の皆様にとって、一人一人が自分なりの「辰・龍」を見つけ、充実した一年にしてほしいと願っています。

1．教員養成課程における大学院構想

本校（斐川西中）では、平成二十三年度も希望して新規採用教員（音楽科）を受け入れました。そして、二十五回にわたる「一般研」では三十一名の教職員が決められたテーマに従って指導しました。また、「示範研」や「その他研」では、本校の教員は、全員が一回以上の公開授業を義務づけているため、すべての教科の授業を一回以上参観し、教科の特質や指導法などを学びました。

こうした取組により、教職員一人一人が自分の職務や役割を振り返ることができ、学校という組織の一員として生徒を育てていることを改めて自覚しました。

現在、大学院では、今後の教員養成が四年間の大学と二年間の大学院の六年間を想定して準備が進められています。新規採用教員として、どんな資質を身につけてほしいか。そのためには、大学と大学院において、どんなカリキュラムで、どんな能力を身につけるのか検討されています。

大学院修了生として、しっかりした意見が述べられるようにしたいものです。

2．大学院修了生の資質向上

小学校では昨年四月から新しい教科書を使用して新教育課程が始まり、まもなく二年目に突入します。時間数や学習内容が増え、教科書も厚くなり、とまどいもあったと聞いています。しかし、この一年間に小学校では多くの研究授業が行われ、学習指導要領の趣旨を理解し、日々の授業改善に努めてこられたとも聞いています。

本校では、この四月から新教育課程がスタートするため、学校行事等を踏まえ、教育課程を編成し、採択された教科書等を参考にしながら、各教科のカリキュラムも整えました。

授業時数を確保するため、企画会で何度も協議した結果、夏季休業と冬季休業を短縮し、授業日数を二百九日と決定しました。

こうした教育における変化をどのように捉え、どのように対応するかについては、我々大学院の修了生にとっては大きな課題です。

そうした中、大学院同窓会本部では、平成二十二年度から「嬉野賞」「奨励賞」の受賞規定を設け、現場で大学院で学んだ理論を実践している修了生を表彰しています。そして、二十四年から同窓会実践研究誌「教職の先達」が東京書籍から発刊される予定です。

島根支部においても、今後、大学院修了生の資質向上のため、研修をさらに充実していきたいと考えています

東日本大震災から心機一転を期して

兵庫教育大学大学院同窓会
島根支部前会長　岩田　進

東日本大震災（二〇一一・三・一一）から、やがて一年になります。まだ覚めやらぬ悪夢のような阪神大震災（一九九五・一・十七）からは、十七年が経ちました。私たちは、改めて地震列島の上で生活をしていることを思い起こしました。

この期を契機に、昨年の漢字「絆」の真意を深めようではありませんか。折しも、教育では子どもたちの人間関係の希薄さが大きな問題になっています。これも大人社会の絆が弱くなってきたことに起因しているのでしょう。

さて、本県同窓会の皆様におかれましては、会員一人一人の御尽力によって、確実な前進の歩を進めております。新しい年の今年は、復興元年であります。わが国をはじめとして教育界におきましても、課題は山積しております。ともに知恵と勇気を出し合って、解決を目指して邁進しましょう。

ところでこのたび、私は、七年間の支部長を退くことになりました。この間、公私にわたって、皆様に賜りました御支援、御協力に厚く感謝申し上げます。

思い起こせば、早川前会長が、島根県では二回目の全国同窓会という素晴らしい実績を残された後の重責でしたので、大変気が重かったのですが、ここまでやって来られたのも、加藤武行様（出雲ブロック長）、勝田　章様（松江ブロック長）、山根明人様（浜田ブロック長）、柳井秀雄様（益田ブロック長）、斎藤尚文様（隠岐ブロック長）の各ブロックの応援のおかげであります。無事、任を終えることができ、衷心より厚く御礼申し上げます。

このほか、さまざまな方々のお世話になりました。なかでも発足から今日まで欠かさず発行してきております「会報」の題字を揮毫していただいた松本幹彦先生は、恩師とはいえ、御自宅まで押しかけてお願いした時の私の顔を思い浮かべると赤面の至りでありますが、その時、先生はひと言「いいですよ」とおっしゃってくださいました。涙が出そうでした。また、派遣教員激励会で激励の御挨拶をお願いした際の県教委の高校教育課長様、並びに義務教育課長様をはじめ関係の皆様には、休日にもかかわらず御出席を賜りました。本当に感謝です。

本年度、私は評議員として、全国の同窓会の「都道府県連携推進本部」の会に出席しました。そのなかでは、

一　会員の皆様の学校内で夏季研修会等の講師を希望される場合、無報酬で大学から講師を派遣してくださいます。

二　会員の皆様で、研究をなさりたい方で、共同で研究したい方に大学の先生が共同研究者になってくださいます。補助金の申請もできます。いずれの場合も上記事務局にお問い合わせください。（TEL　〇七九五・四四・二四〇六）また、大学からのお願いですが、現職で大学院入学を希望する人が少ないので大変困っておられます。知人、友人にぜひ話して、勧めてみてください。お願いします。

さて、支部持ち回りの総会も三回目に入りました。益田大会では石川勝規先生（吉田小）が「小学校教師の共感性と同僚性がバーンアウトに及ぼす影響」と題する研究成果を発表してくださり、**教師の燃え尽き症候群**への警鐘を鳴らしてくださいました。また益田市の郷土史家として著名な矢冨巌夫氏の御講演**「幕長戦争～石州口の戦い」**は、長州軍

が初めて幕府軍を破った戦いとして有名で、矢冨の語り口の面白さ迫力に手に汗を握りました。その他、各ブロックとも、ブロック長様を中心に会合を重ね、参加者のためになるよう、意匠を凝らし、工夫して、最新の情報や講演で歓迎していただきます。また、「会報」も広報の村木隆夫氏、岡田昭彦氏を中心に第十三号を迎えました。全国の同窓会でも、これだけの中身のある「会報」を毎年発行している県は少ないとのことで同窓会の事務局でも、ぜひ送付してほしいとのことであります。

最後になりましたが、これまで、御多忙の中、本部事務をつつがなく運営していただきました前事務局長の足立靖志氏はじめ、事務局の皆様の御苦労に感謝申しあげ、筆をおきます。これからは、新支部長の梶谷光弘氏（出雲市立斐川西中学校長）を中心に、同窓会を一層盛り立てて行ってください。御記念申しあげます。（二〇一二・二・一）

出雲支部大会を終えて

出雲支部長　加藤　武行

出雲大会は、二〇一一年七月三〇日、出雲弥生の森博物館（懇親会は駅前〈神門〉）にて、二十四名の参加を得て、好評のうち無事終了しました。

総会では、長い間会長を務めて頂いた岩田進さんが顧問に、新たに梶谷光弘さんが会長に就任されました。岩田前会長は、本同窓会の中興の祖と言うべき数々のご活躍をされました。ここに深甚なる謝意を表するものです。

兵庫教育大学名誉教授の成瀬敏郎先生の「砂原遺跡発見の意義」についての講演は、マスコミレベルでしか知らなかった世界をパワーポイントで詳しく、実証的に説明していただき、院生時代の講義を彷彿するものでした。旧石器ねつ造問題以降、石器の判定については、タブー化されていたようですが、先生の場合は「風成ジン」らしく地層の分析から実証され、極めて説得性のあるものでした。

会員による研究報告では、①出雲市立斐川西中学校校長の梶谷光弘さんによる「華岡流医療の地方伝播について」、②知夫村教育委員会派遣指導主事の手銭俊夫さんによる「引っ込み思案による社会的スキル訓練の効果について」の二つを発表していただきました。お二人は管理職・指導主事でしたが、その立場を超えて研究者としての節度を堅持し、学究的で知的レベルの高い発表内容でした。同窓生として頼もしく、誇りに思いました。世の中には様々な同窓会がありますが、このようなアカデミックな内容が織り込まれた同窓会は本大学院同窓会以外にはないのではないでしょうか。私たちは、職場・校種・年齢・体験等すべてが違いますが、唯一共通している点は、院生時代に培われた知的関心の高さです。今回の二つの会員発表は、それぞれ専門分野を異にしていても私たちの知的好奇心を大いに刺激してくれました。十分な時間がとれなかったことが残念でした。

懇親会では、二十一名の多数の参加があり、和気藹々の交流が展開され、会員同士でそれぞれのネットワークづくりが進んだようです。

大会運営でのヒットは、校長・教頭・教諭の三名の会員を擁する斐川西中学校の全面協力体制が得られたことでした。ここに総務関係を集中させ、総務部長を実質大会実行委員長として、研修部・厚生部・会計部の体制を組織しました。二回の準備会と事前研修会を経て、本大会に臨みました。一端組織体制を整えれば、さすが優秀者の集団で、万事スムーズに推進できました。改めて関係していただいた全ての方々にお礼を申し上げます。

さて、ここで突然話題を変えます。同窓会員同士の呼称についての問題です。すでにお気づきの方もいるかと思いますが「岩田進さん」、「梶谷光弘さん」「手銭俊夫さん」と表記している点です。同じ同窓生に対して「・先生」「・・先生」と呼び合うのは、はっきり言って異常です。私のように学校の「先生」を卒業して庶民になりきっている者にとっては皮膚感覚からしても違和感をもちます。私たち同窓生にとって先生と呼ぶのが適切な方は、本学の先生方です。

もし、吉川英治の「我以外、皆我が師」で全ての人を尊敬して「先生」というならば、教え子や若年後輩に対しても「先生」と言うべきでしょう。私たちは、教育研究と実践において同志であり、意識的にフラットな人間関係で呼び合うことも大切ではないでしょうか。

島根県支部同窓会総会出雲大会
出雲弥生の森博物館
学芸員による施設巡回研修

出雲支部の研修により、弥生の森博物館を案内してもらいました。学芸員さんの説明を記載しています。

西谷墳墓群の二・三・四・九号墳は、全国最大級の四隅突出型墳丘墓でした。これ以降は、大きな墓が作られなくなり、西谷にあった勢力がどこかに行ったと考えられています。もしくは、勢力が小さくなったか、変わったと言われています。中国地方でも、古墳時代には山路古墳しか大きなものがないです。再び大きな古墳が作られるようになったのは、古墳時代の終わりごろ、今市大念寺古墳であります。また、中村一号墳は発見当時、存在すら知られていなくて、工事中に発見されました。しかし、古墳時代の埋葬されたまま見つかった珍しい古墳でした。そして、出雲地方の狭い範囲の勢力であったと考えられています。

次に、特別展示室を案内してもらいました。当時の弥生人の風俗や生活が展示されていました。弥生人は、顔に入れ墨をしていました。「弥生人の姿」を、時期によって、入れ墨に変化があることを展示していました。また、漁をする時、邪悪なものを追い払うということで入れ墨をしていたと考えられています。施設の中には、弥生人の顔を表現した人形があり、絵画の中には「黥面」のない資料もあります。これは中国の刑罰のひとつに入れ墨があったため、近畿地方の豪族がいち早く廃止したと考えられています。当時の髪型も展示してありました。当時、鳥の格好をして狩りをしていたこともわかりました。とても有意義な研修でした。

島根県支部同窓会総会出雲大会
「砂原遺跡　発見の意義」
兵庫教育大学　名誉教授　成瀬　敏郎

ここに、二つの石器がある。一つは長さ五cmくらいある石器である。もう一つは長さが七cmくらいで先を尖らしてあり、なかなか立派である。こういったものが出土された。ここ二十年の間で気候変動の研究が非常に進歩した。海底をボーリングして、土をとり、半分に割って、プランクトンの酸素同位体比を調べることによって、過去六百万年前の気候を明らかにした。もう一つは、北極と南極の氷河をとり、中のプランクトンの酸素同位体比を調べることで過去の気候を明らかにした。少なくとも四十四万年前の気候が復元されるような時代になってきた。気候を調べるのに、酸素同位対比の他にもう一つ手がかりがあった。それが「風成塵」である。空気の中のほこりが当時の気候を反映する。

そこで、成果の一つにSPECMAP年代であり、これは九十万年間の気候変動を復元したものである。十万年間隔で暖かい時期がやってきて、その間は氷河期になっていることがわかる。もっと細かく見ると激しい気候変動がわかる。これを使って一九九〇年代から研究を進めた。例えば、十万年前の砂原遺跡の様子もわかる。また、出雲には四種類の土の層がある。トラ斑土、次が薄いトラ斑土、次が赤色土、赤褐色土になる。こういったものを手がかりにして、年代を決めることができる。トラ斑土は三十万年前、薄いトラ斑土は二四一五万年、次が赤色土二十万前、赤褐色土十二万前として、仮説を立てて行っている。例えば砂原は、十二万年前の非常に暖かい時にできた海成段丘であることがわかった。こうやって砂原の断面を見ると、トラ斑土である。上に薄いトラ斑土、上に赤土、上に十三万年前に大山から飛んできた火山灰が積もり、そして赤褐色がたまっている。砂原では、ここから石器が出土した。そして、これらの上に十三万年の三瓶の木次火山灰が積もっている。

さて、これは砂原を位置した地図である。砂原を調査したのは、この辺りに海成段丘が発達していたからである。ここから西に行けば、田儀海岸の海成段丘もある。十二万年前のものである。砂原は五段くらいの階段状の堆積層がある。次にこれがいつできたかを

調べるために、地層を丹念に見たがわからなかった。ちょうど九号線のキララの前に行ってみると、四枚の火山灰があり、ここへ何度も調査にいった。これを調べていくと、当時海面だったことがわかる堆積物があった。これが十二万年前の海面であったとわかった。二〇〇九年八月八日に玉随製の剥片を見つけ、同年の八月二十二日から六人くらい旧石器の専門家がきて、予備調査を行った。その時、どうやら五点くらいは旧石器だろうと考え、本調査を二週間行った。本格的には二〇一〇年から調査を始めた。

二〇〇九年八月八日に島根県出雲市多伎町から玉随製の剥片を発見した。さらに同年八月二十二日からの三日間の予備調査において露出面に表れた同層中から五点の人工的に打ち欠いた石片が確認された。そして、十二万年前の古土壌層中から石器、石核、砕片など十五点が出土した。これは日本で最も古い石器である可能性がある。出雲に旧石器時代があるのではないかと思っている。今後の調査が必要である。

いつ日本に人類が入ってきたか。旧人であるか。もっと前の三十万年前くらいになるのか。それがはっきりしてくる。どの地層から出てくるのか。旧石器の出現が知られることになる。

島根県支部同窓会総会出雲大会

「華岡流医術の地方伝播」

斐川西中学校　校長　梶谷　光弘

本日は、主に大森泰輔（三代）と加善（四代）について話していきます。まず、大森泰輔は、明和八年（一七七一）、母里藩士の次男として生まれました。そして、六十三才の時、華岡家へ入門しています。そして、翌年には紀州「春林軒」へ出かけ、医学修行を行っています。当時、華岡青洲には、すでに全国六十五カ国から入門していました。出雲国からは、十五名入門していました。入門すると、門人たちは平山の野原を歩き、薬草を収集したり、スケッチしたりしました。華岡家では、傷口の消毒や口腔の処置にロウザワアトルを使用していました。

当時は、いったいどれくらいの乳岩手術をしていたかというと、乳岩治療は二百五十余人したと書かれています。また自覚症状として、乳岩は、肩、背中にまず症状があらわれるとし、二十日、三十日では痛み出さず、少なくとも半年、一年以上していから痛みだすと言っています。次に触診です。乳岩は手で押して見ると、何となく手触りに角が立っていて、堅さも岩のようであると言っています。当時は、乳癌と書かずに、「乳岩」「乳厳」と書き、難病であったことを示しています。そして、手術の判断になります。全身転移する前、つまりリンパ節から転移するまでに手術すれば、百人に五十人は治ると青洲は言っています。また、現在のように脇下のリンパに転移しているもの、骨についているものは手術してもなおらないと言っています。

そして、手術です。当時の手術には滝の如く血が出てきて、その中で乳岩を見つけなければならないと言っています。したがって、出血の量を少なくすることが、当時の手術の最たることでした。再発の目処が五年目であるところ、現在と同じであります。乳岩手術は指で行いは、当時は手袋をしていなかったこと、消毒は焼酎で行っていたことがわかっています。手術後にばい菌が入ると助からないとも書かれています。また、麻酔薬は人によって、その効能が違うため、人によってはずっと眠ったままの状態で、そのまま死んでしまう人もいたと言われています。当時の医学の難しさが表れています。

島根県支部同窓会総会出雲大会

「引っ込み思案児童に対する社会的スキル訓練の効果について」

知夫村教育委員会
派遣指導主事　手銭　俊夫

引っ込み思案児童は、目立たなくおとなしい行動のため、担任から適切な援助を受ける機会が少なかったのではないか、社会的スキルを習得する機会が必要なのではないかと考えました。そこで社会的スキル訓練の基本形を考えました。「教示→ロールプレイ→フィードバック→モデリング→般化」を基本形とし、モデリングの後、ロールプレイへ戻るという活動を繰り返し、般化していくという形にしました。

次に社会スキル訓練プログラムの開発です。例えば、ゲーム内容はジェスチャー、参加者は学級集団二十四人、回数は二回、主なスキルはアイコンタクト、参加者は引っ込み思案児童などです。この他にも、しりとり、伝達（絵）など様々なプログラムがあります。

課題として次の三つが見えてきました。①さらに有効な社会的スキル訓練プログラムを考案していくこと。②サンプルが少なすぎて一般化できない。実践を増やしていくこと。③学校をベースとしたプログラムを開発していくこと。これからも本研究に取り組んでいこうと思っています。

放射能に関する研修会

主催　兵教大大学院島根支部同窓会

一月二十八日（土）島根大学教育学部附属小学校において、講師に島根大学、財団法人放射線利用振興協会から多数の講師を迎え、開催されました。

テーマは「放射線の基礎と放射線被ばくの健康影響」でした。午前は講義形式、午後は実験形式で行われました。初めに、放射能の基礎として、放射能と放射線の違い、放射線の性質、光電効果のしくみを学びました。緊急時には教育現場にいる教師が放射能について、正しい知識をもって、適切な対処をとることが必要であることがわかりました。

次に放射線測定法、放射線・放射能の単位、放射線被ばくの単位、放射線防護です。その中で放射線防護の目的は、主として低線量領域における確率的影響のリスクを合理的に達成できる程度に低減するので、線量（mSv）は安全と危険を区別する指標にはならないと学びました。

放射線被ばくと健康影響について、しきい値のある確定的影響（皮膚の紅斑など）としきい値を仮定しない影響である確率的影響（ガンなど）の説明、次に組織・臓器の放射線感受性の説明があり、細胞分裂の高低が感受性の高低に影響を与えていました。さらに放射能のDNAレベルでの影響、確率的影響で放射線誘発ガンの特徴、被ばくによる発ガンリスクなどの説明がありました。

午後には、放射線測定器の操作、測定場所でのバックグランド（BG）、様々な放射線源の測定（自然・人工）、放射線の遮へい（放射線防護）をしました。

シリーズ5『あれから』

★すべての「観」を変えた大学院生活

（第三期　修了生）　毛利　直巳

私は昭和五十七年四月に兵教大大学院三期生として嬉野の地を踏みました。新採三年間が終了した時点での大学院派遣者でした。専攻は、学校教育専攻教育方法コースでした。大学時代、そして現場での三年間の実践の中心にあったのが、「陶冶と訓育の統一」理論でした。簡単に言えば、授業において、子どもたちは、様々な内容を結果的には知識として学びながら、同時にその過程において人格形成を行っているという内容のものでした。では授業の中で、子どもたちはこのことを具体的にどのようにして行っているのか、そのメカニズムを理論的に追求してみたいという思いから大学院での研修を強く希望しました。

入学式後、オリエンテーションがあり、研究テーマごとに指導教官が決まり発表され、私は杉浦美朗先生のもとで学ばせていただくことになりました。先生は、デューイ（ジョン・デューイ）研究のわが国では第一人者ということで有名な方でした。当時杉浦研究室には私を含めて七人の院生がお世話になりました。先生から研究テーマについて、個別にご指導をいただき、テーマとして決定したのが、「授業を通しての人格形成過程の研究～コミュニケーション過程としての授業を通して～」でした。入学してから約一ヶ月後には決定したことを記憶しています。

その後、毎週定期的にゼミが先生の研究室で行われ、ゼミのたびに院生は原稿用紙に発表内容を記載し、持ち出していました。一人の発表時間が平均二十分間、質疑応答時間が三十分間、その後先生からのご指導があり、全員が終了するころには日没を迎えていたことも珍しくはありませんでした。

先生のご専門が先述の通り、デューイということもあり、研究テーマについてはデューイの理論を中心に学び直す状況も多々ありましたが、私にとっては教育研究において、ある意味デューイ理論に触れさせていただいたことは、とても新鮮で斬新でした。私は特にコミュニケーション論について学ぶ上で、デューイの理論がとても役に立ちました。同期生七人の中では、私が最年少ということもあ

り、年齢的にはかなり離れた人の研究テーマは難しいなりにも私には大いに勉強になりました。

先生から教えていただいたことは、学問の厳しさと同時に面白さでした。正直に言って、私は自分の研究テーマとは違ったまた別の研究テーマについても当時追求していました。大変僭越な言い方ですが、当時の私にはそのことが面白くてたまりませんでした。問いが新たな問いを生むように、次から次へと研究したいことが浮かんできました。

大学院での二年間は、私にとって、研究を深めたいと思っていたことが解決できた喜びよりも、さらに新しい研究テーマの発見や研究意欲のさらなる醸成といった付加価値の方が大きかったように思います。実はこのことが色々な意味で今の自分自身の大きな支えになっていることを改めて実感しています。閑話休題。大学院で学ばせていただいたことはこれだけに留まりません。当時、二十七歳だった私は、ゼミ終了後の飲み会の世話(バスの手配や会場選び、料理選定、二次会の世話)に奔走しました。色々な面で行き届かず、先輩から叱られたこともありました。また、単身寮での生活では、週末のトイレ掃除や風呂掃除が定期的にあり、他の寮生とともに汗水流して頑張りました。そして寮生活では何と言っても私のその後の人生を大きく左右するぐらいの素晴らしい先輩との出会いがあり、教師として、人間として生きていく上で、何にも代えがたい貴重な教えや示唆を与えていただきました。その方とは今でも折に触れて電話連絡や年賀状のやり取りをさせていただいております。

その意味では、院での二年間の生活は、私にとって、それまでの「教育観」「人間観」「人生観」を始めとするありとあらゆる「観」をいずれも根本から覆す強い影響力を持ったものでした。今の自分があるのは、正にこの時の生活のおかげと深く感謝しています。今後とも我々兵教大大学院の同窓生一人一人が修了生としての自覚、使命感、矜持を持ち続け、それぞれの職場で十分発揮することで本県教育の更なる充実と発展に寄与できるよう更に連携を深めていきたいと思います。

支部紹介シリーズ7

隠岐支部の紹介と活動

隠岐支部長　齋藤　尚文

同窓会誌第九号に「島根支部総会隠岐大会を終えて」(平成二十年二月二十日発行)を書いてから、ほとんど活動をしていないのでこの原稿の筆も重いものとなりました。これも身から出た錆と思い、総会以後の会員の動向と課題、そして隠岐の動きを紹介して責任を果たしたいと思います。

隠岐大会以降、会員から校長昇任一名、同じく校長登載者一名、教頭昇任三名を出し、他の二名も各校の中核教員として活躍しています。また、退職された方々二名も健在です。さらに、学部卒業生が中堅リーダーとして活躍を始めています。しかし、平成十八年三月に大学院修了生を出してから隠岐地区出身者の派遣が途絶えています。また、現在の学部在籍者も一名にすぎない。兵教大の卒業生・修了生が隠岐の教育を支えている現状を考えるとき、後進の育成が大きな課題となっています。また、各自の職務が多忙を極め、一同に会する機会を持ちにくくなっています。各自がそれぞれの持ち場で活躍しているだけに、重要な情報を持っている。その情報を交流し、隠岐の教育の充実に貢献するよう活動を再開しなければならないと考えるところです。

この四年間に島前高等学校に一名、知夫村教育委員会派遣指導主事に一名の会員が来島された。人づてにこのことを聞いたが、このような出入りの情報を交換することは県支部の課題ではないだろうか。情報をいただければ歓迎会などを計画でき、活動に弾みがつくのではないかとも考えています。

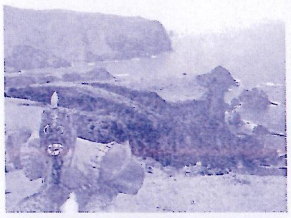
前回の大会後、隠岐ではジオパーク登録へ向けての動きがあった。ジオパークとは地球活動の遺産を主な見所とする自然の中の公園のことです。ジオパークは、ユネスコの支援により二〇〇四年に設立された世界ジオパークネットワークにより、世界各国で推進されています。世界遺産の自然公園版です。認定されるためには、地域の地史や地質現象がよくわかる地質遺産を多数含むだけでなく、考古学的・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む、明瞭に境界を定められた地域である必要があります。また、運営組織と運営・財政計画を持つことや地質遺産を確実に保護することなどももとめられます。現在日本では、洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島、山陰海岸、室戸の五地域が世界ジオパークに認定されています。また、隠岐を含め二十地域が日本ジオパークに認定されています。隠岐は昨年世界ジオパーク登録への推薦を受け、現在今年後半での登録に向けて準備を進めています。

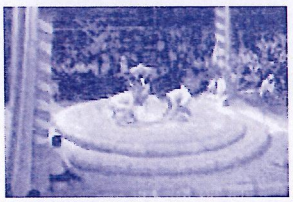
これまでも隠岐は自然が豊かだと言われてきました。しかし、この自然にどのような価値があるのかについて深めることはあまりありませんでした。ジオパークの知識を持つガイドによる案内を受けたことがあります。その説明を聞き、今までと違った眼で故郷を見つめ、改めてその素晴らしさに感動しました。

また、初場所では精彩を欠きましたが、八角部屋の「隠岐の海」は、大相撲で前頭筆頭までかけあがりました。この関取も育てた隠岐古典相撲が、七月二十八日から夜を徹して開催されます。場所は、隠岐の島町の総合グランドを予定しています。昨年の今頃、ACのコマーシャルで、「思いやりも日本の国技に」と繰り返された人情相撲の大会です。

この古典相撲を題材にした錦織良成監督の映画「渾身」もこの秋公開される予定です。隠岐の自然、伝統、文化から目を話せない一年になりそうです。機会がありましたら、是非ご来島くださいませ。

兵教大大学院同窓会「御退職をお祝いする会」





平成二十三年七月二日(土)に、松江市サンランポーむらくもを会場に「岩田進会長の御退職をお祝いする会」を行いました。

当日、岩田会長から小学校で新学習指導要領がスタートした今、どのような配慮が必要か。また大学院同窓会現状報告などを話されました。島根支部の活動で岩田会長は、時代を担う院生を兵教大に送ろうとおっしゃいました。さらに、右へならいではいけませんが、島根県は、人材育成こそが将来を明るくする希望の灯です。人は鍛えなければなりません。秘めた才能は秘めたままでは何の意味ももちません。鍛えてくれる場所へ県の威信と個人の名誉を背負って出かけて行き、島根に帰って貢献してもらいたいと熱く語っていただきました。

今後とも教育、そして同窓会にも参加して頂き、御経験を活かして頂き、御指導・御鞭撻をよろしくお願いします。

編集後記

今回の会報の発行にあたりまして、お忙しい中、原稿を提供して頂いた会員の皆様に感謝します。ありがとうございました。

同窓会の原稿や会費のことで問い合わせが必要な場合は、左記まで、ご連絡ください。

出雲市立斐川西中学校　岡田　昭彦